

新春鼎談

「エネルギーから変わるまちづくり」



①

近年“SDGs”や“カーボンニュートラル”等といった、これまでの時代とは違った、新たにエネルギーをクリーンに、脱炭素社会をめざすといった、国際的にも、国内でもその目標に向けて取り組みが始まっています。

今回はSDGsや再生可能エネルギーの観点から「エネルギーから変わるまちづくり」をテーマ鼎談を行いました。



③



②

●参加者／

- ①遊佐町長 時田 博機
- ②鳥海南バイオマスパワー株式会社
取締役発電所建設所長 菅原 智幸 氏
- ③株式会社生活クラブエナジー
代表取締役 半澤 彰浩 氏 (オンライン参加)

●進行・コーディネーター／

- ④NPO法人環境自治体会議環境政策研究所
理事長 小澤 はる奈 氏 (オンライン参加)



④

③株式会社生活クラブエナジー

震災を機に全国の生活クラブと地元の生産者等が出資して2014年に設立した会社。全国の発電所約100か所と提携し、電気を仕入れ、高圧事業所へ98か所、他17,000世帯へ電気を供給している。ちなみに、生活クラブ生協等団体が設置した蚕桑地区に設置されている「庄内遊佐太陽光発電所」によって発電された電気は、生活クラブエナジーが購入し、遊佐町役場等へ電気を供給しています。

②鳥海南バイオマスパワー株式会社

鳥海南工業団地に輸入木質ペレットを主燃料とするバイオマス発電所を建設中。県内最大級となる出力規模が52,900キロワット、年間で約12万世帯分を発電します。令和6年度中の運転開始を予定。東北電力グループ企業。

④NPO法人環境自治体会議環境政策研究所

遊佐町が長年取り組んでいる「環境マネジメントシステム：LAS-E」（役場の仕事を環境にやさしいやり方に変え、同時に地域環境をよくしていく仕組み）を支援しています。併せて「持続可能な地域創造ネットワーク」という持続可能な地域を目指す自治体やNGO等の繋がりを支える仕事をしています。

小澤／今日は「エネルギーから変わるまちづくり」ということで、エネルギー事業に関連する事業者の皆様から来ていただいております。エネルギー事業の中心のももそうなのですが、エネルギーを中心として遊佐町のこれからをどのように形作っていくか、未来志向の話が出来ればうれしいなと思っています。本日はよろしく願います。

2024年の稼働をめざし バイオマス発電所

菅原／弊社は平成28年に会社を設立したのですが、もともとは株式会社オリンピア様が検討を始めていた事業で、バイオマス発電事業を始めるため全国を探した末、遊佐町が適地であると判断し、決定したものです。そして、今年ようやく県の工業団地を購入させていただき、造成工事を着工いたしました。

来年度から工事が本格化します。予定では2024年10月に発電所を完成させて電気を届ける予定です。燃料を海外から輸入する計画であるため、酒田港の小湊埠頭を使用します。

町長／鳥海南バイオマスパワーが進出した鳥海南工業団地の土地は、立地的には酒田北港から10分かかるというエリアですし、堆積砂丘の上にあるので、地盤はしっかりしていると思います。これから町としても新たなチャレンジや応援もしていきたい

と考えています。



バイオマス発電所完成イメージ

エネルギー産地連携交流を 庄内遊佐太陽光発電所へ

半澤／弊社は、発電事業自体は行っていません。生活クラブグループや地元の生産者などが出資して出来た再生可能エネルギー発電所と提携し、受給調整して届けて電気を販売しています。色々とご縁がありまして、今の「庄内遊佐太陽光発電所」の土地を整地して、生活クラブの生産者地元の方などが出資して、同発電所を2019年4月に本格稼働しました。

発電量は18メガワットで約5000世帯ぐらいの供給能力があります。

ここで発電された電気は当社と東北電力に売電しています。小澤／再生エネルギーを起点として産地交流がすすんでくると面白そうですね。

半澤／そうですね。実は、エネルギー政策で生活クラブのエネルギー7原則を作っていて、その中に「地域への貢献」という項目があります。自然環境に留意した発電事業ということで、エネルギーの産地連携交流を深めるということも原則に入っています。

町長／地域農業と発展を守り、さらに広がっていくように、生活クラブをはじめ、庄内みどり農業協同組合と共同宣言を結んだと認識しています。当時はSDGsにつながると思ってもいませんでした。

他にも共同開発米をはじめ石鹼運動等、連携して先人が努力してきた成果を次の世代につなぐ責任があると思っています。

地域に貢献するエネルギー

菅原／バイオマス発電所の設置で地元からの雇用については今のところ具体的に申し上げられない状況です。しかし、発電所の操業に伴い新たに燃料を輸送する業務、燃え殻を輸送する等、付帯する業務が多くありますので、そういったところで地域の方々に少しでも貢献したいと考えています。

半澤／庄内遊佐太陽光発電所は、もう少し地元で活用していけるよう検討していくことが重要と考えます。毎年発電利益から1000万円を

寄付しています。直接ではありませんがSDGsを頑張っている企業や福祉関係等、地域団体の活動や事業を広げることに助成していくことで、地域へ貢献していきたいと思えます。また、FEC自給圏の広がりにより、実質的なSDGsの実現に近づいていくものと思っています。

※FEC自給圏とは、食料(Foods)とエネルギー(Energy)、ケア(Care)・医療、介護等)をできるだけ地域内で自給していくこと

持続可能なまちづくりへ カーボンニュートラル宣言

町長／過去、陸上風力発電所が完成して、半年後に東日本大震災が発生したことを考えると、CO₂を出さないで電気を発電していく方法を、色々とチャレンジしていくことがこれから重要になってくると思います。

洋上風力の新たな取り組みについても県へ丁寧な説明をしてもらっている現状ですが、前提として地域にリスクは最小限にしたいと考えています。また、地球の将来を考えると、であれば、脱炭素にむけて町でも積極的に取り組んでいかなければならないと思っています。

冬になれば除雪車がなければなり

ませんし、子どもたちを送迎するためのスクールバスは必要、サラリーマンは通勤に車は欠かせません。現実的にカーボンゼロは難しいかもしれませんが、ニュートラルにむけたまちづくりを最先端で頑張っていきたいと思っています。世帯数から見たら5,000世帯に満たない小さい町にバイオマス、太陽光、陸上風車が設置されている現状でありますので、次世代に向け、町としても「カーボンニュートラル宣言」をしたいと考えています。

小澤／次世代や地球を将来につないでいくと、前向きな発言をいただきました。世界の動きとしても、今がよければ、経済がよければ、いというわけではなく、2050年、2100年のことを考えて、いまの経済、社会の在り方を変えていこうという動きが一齐に始まりました。2050年には温室効果ガスの排出量を実質ゼロにしようと、国際的な合意のもと、それに向けて各国や企業が動き始めていますね。

遊佐町は非常に自然環境が豊か、穏やかなので、豊かな自然の中で生活している方は、なかなか地球環境の変化や危機を感じにくいのではないかと思います。

そういった中で、地元の企業さんが将来のことを考えて、こんな動きをしているんだということが町民に見えていけば、大きな変化を実感していただけることにつながるのではないかと期待しています。



庄内遊佐太陽光発電所

将来を見すえ SDGs達成をいかに

半澤／私たちは中期的な計画を立てていて、2030年に温室効果ガスを50%ぐらい減らさないと2050年にカーボンフリーができないと想定しています。省エネも大事ですが、再生可能エネルギーの導入は柔軟性、かつ積極的に進めていくべきだと思います。その一つに生活クラブグループでは、地域に資する再生エネルギーの開発という視点を重視しながら進めていく計画があります。例えば畜産の生産者と連携してバイオガスを進めようとしています。既にある資源を活用するため、北海道の

牛が1200頭いる牧場で糞尿を発酵し、ガスを発生させて、電気とお湯を作っていく小さな仕組みです。なぜ北海道なのかというと、地震でブラックアウトしたことがあって、牛の搾乳機が電気のため牛乳が絞れない、併せて流通ができない、加えて牛の調子が悪くなってしまう、乳房炎で亡くなってしまうということが少い、災害で電気が止まっても減らすため、発電所から一定の地域には供給する仕組みもつくっております。

SDGsの実現にはスローガンだけではだめで、実際にローカルSDGs（地域循環共生圏）のように、遊佐町も具体的に地域で取り組んでいくことが大事だと思います。SDGsにおける17のゴールをめざすには実行に移すことが大事だと思います。

小澤／私もその通りだと思っています。生活クラブエナジの電気は組合員じゃなくても買えるものでしょうか。

半澤／組合員でないと購入できません。生活クラブ生協が約90%出資しているの、子会社の扱いを受けて生協と実質同等と見なされています。生協は消費協同組合があつて、員外利用はできません。組合員になつていただいでから供給している現状です。

菅原／木質バイオマス発電所は、安定的に電力を供給するところがめざ

すべきところでは、個人的には、町から発生する自然由来の燃やせるものを将来的に燃料として使っていければSDGs達成に向け貢献できると思います。

現在は、固定価格買取制度（FIT）を利用して計画していますが、適用期間が終了した後の事業を成立させつつ、地域にも貢献できるような工夫も今後必要となってくるかもしれません。

小澤／半澤さんのお話から、毎年売電収益から1000万円を寄付し、酒田市と遊佐町の地元でSDGs達成に向けた活動を頑張る方や自治体の方に使っていただき、お金を循環させていく経済的な貢献の点もよくわかりました。

菅原さんの木質バイオマスについては、FITもいずれば終了しますから、そこを見据えて遊佐町の木を切つて、燃料を調達した植えて、と循環する本来のカーボンニュートラルをめざし、町内で仕事をつくるような大きな絵を町が描き、長い時間をかけて準備していくのも一つの手かなと思いました。

CO₂削減の取組みに まずは「見える化」

半澤／先ほども言った通り、遊佐町は自然環境が豊かで、また、多くが農業を営んでおり、できるだけ一人ひとりが参加できるように取り組みが大事だと思います。再生可能

エネルギーは電気だけではなく熱もあります。デンマークやドイツにいくと、小さな町だと熱用に配管されていて、その熱を地域で使用するというのもしています。熱は電気よりエネルギー効率がいいので魅力的です。これは配管することが必要ですがおそらく遊佐町でできるのではないかと思えます。そうすれば、町民一人ひとりのガスとか電気による暖房機を使わなくていいことになりそうです。給湯もそういう循環のひとつです。あと、農業ではハウスやトラクター等、何かと結構石油使いますよね。例えば、小さな木質ボイラーを開発して、温室ハウスを重油の代わりにしていく等、小さな取り組みをたくさんしていくことが、町民が実感するまちづくりとかSDGsの取り組みにつながるのかなと思います。

余談ですが弊社ではなく、地域新電力をとって、秋田県にかほ市、酒田市、遊佐町共同により、例えば「ジオパーク新電力」を設立して、エネルギーの地域循環型のエネルギー供給していくような構想をつくる考え方も面白いと思います。

菅原／再エネ拡大の議論は電力の脱炭素化が論じられておりますが、農業に目を向けると脱炭素の可能性はまだまだあると思えます。例えば、草刈り機等はエンジン駆動が主流ですが既にバッテリー駆動のものも製品化されています。値段は高いですが、そういったものに切り替えるこ

とを町でサポートするなどして、農業のカーボンニュートラル、そして町のカーボンニュートラルへ近づけていくことができるかなと思えます。遊佐町は農業の町ですので、ある意味カーボンキャプチャーしていると思います。例えば、トラクターが排出したCO₂を、田んぼが吸着したCO₂から差し引いて、自分がどのくらいCO₂排出削減に貢献しているか数値にして、「見える化」したら面白いのではないかなと思えます。

※カーボンキャプチャーとは、二酸化炭素を回収すること。

小澤／すごく面白いアイデアだと思います。遊佐町は現時点でもゼロカーボン宣言が可能な所にいるのではないかと思えます。全国の他の町では、宣言しても2030年、50年に向けた具体的な取り組みが見えていないところが多い現状です。そういった意味で積み上げがたくさんある遊佐町が優良事例として注目を集められるのではないかなと期待しています。

町長／ゼロカーボン宣言をめざすため、まずは「見える化」をする。まだどこもやっていないことなので面白いと思えました。

今、国が脱炭素の先行区域を令和4年度から各地区20か所くらい募集するそうです。いま菅原さんから話しがあった

「見える化」も宿題としながら、町としてもこういった新しい支援制度に手を上げ、脱炭素をめざしたいと思えます。

小澤／国でも2050年の脱炭素に向けて人やお金を投入しようとしているのですが、やる気のある自治体を集中的に支援してモデルをつくっていく形です。遊佐町がこれまで取り組んできた取り組みは、外の力を使いながら再生エネルギーを開発してきた点が上手なやり方であったと思っています。

これからも洋上風力含め、再生可能エネルギーの開発について地元でどのように受け止められるかが大事だと思います。

かつて遊佐町が初めて陸上風力を受け入れる時にガイドラインを作ったように、町がしっかり意思決定をしていくこと、また、最初の過程から町民がかかわることが重要だと思っています。これからのいろんな角度で再生可能エネルギーが開発されていくなかで、自治体は一般住民の意見を反映させられる仕組みを準備する必要があると思えます。これまでの遊佐町の実績からすれば、引き続き可能だと思えます。

新しい町の姿が見えてきた

小澤／今回の座談会では町民の方をまきこみながら、再生可能エネルギーを地元でつかうということより



議論が白熱し予定時間を少々オーバーしました

も、エネルギーを供給していく立場で全体をリードしていく、新しい町の姿が見えたような気がします。脱炭素に向けて、大企業は実践も情報発信していますが、地方の中小や零細企業は、まだまだ目の前の仕事に必死に頑張っている現状です。カーボンニュートラルは、市場全体で求められますので、二次請け、三次請けまでそういう認識をもつことが重要です。地元で先行して再生可能エネルギーに取り組んでいる動きを町民や企業に見せていきながら、巻き込みを図ることが町内事業所との関係の作り方の一つだと思います。今日の座談会を通し遊佐町のこれからつながっていくべきよいなと思えました。

一同／ありがとうございました。